



Kentaro Orita



Masami Kojima



Akihiro Takahashi



Shintaro Kawaishi



Naoto Sagara



Kazuo Yayoi



Shinichi Edo



Tetsuro Tokoro



Shotaro Kikuta



Hiroki Ikeuchi



Tomohiko Mukai



Yoshitaka Kinoshita



Yusuke Date



Tsuyoshi Ichinari



Katsumi Takayama



Seiji Takasaki



Hin Rachana



Norimitsu Mabuchi



Takeshi Higashi



Emi Kondo

技科大の顔

04

2024年 夏号

同窓会と以下の在学生が協力し、制作・配信しています

機械工学系 代田 智教

電気・電子情報工学系 内藤 初月

建築・都市システム工学系 末廣 杏月



織田 健太郎

Kentaro Orita

2013年 機械工学専攻 修了
梅本実 研究室

1988年 広島県生まれ
鹿児島高専 卒業

2013年 株式会社荏原製作所 入社
現在 同上 生産プロセス革新・品質保証統括部
製造技術開発部 所属

技科大での自他学科の講義、研究、友人や留学生との交流、食堂での教授陣との毎日の会話、著名人を招聘しての特別講義にて毎回のように質問させて頂いた経験は、自らの芯と余白を作り出してくれました。

私は機械工学を学ぶことを通じて自身の強みを育みました。しかし近年の事物の二面性への眼差しと、今年2024年、AIの一般へのリリースにより量子確率論の概念が爆発的に浸透し始め、古典物理学の概念を基に構築されてきた世の中の一部が指数関数的速度を以て不可逆的なパラダイム転換を始めました。

学生時代、人文系のリベラルアーツの講義数を増やして頂きたいと思っていましたが、このような大転換の時代の現在、限られた講義時間を人文系科目に供さないことが自身の強みを際立たせてくれたと考えています。また、技科大に於いてのリベラルアーツ教育は、技科大のサテライトキャンパスともいえる周囲環境、特に表浜をはじめとする豊かな自然風土から受けていました。

リベラルアーツのうち藝術鑑賞は、定量化が難しい面を直観で判断する力を養う行為だと思います。人は「粒子と波動」という超小型高感度のセンサを持っており「感覚」を有しています。これが人とAIの決定的構造的な差であり、自身のセンサを鋭くすることが自分らしく生きることの起点なのだろうと思います。今後は、現実世界を機械工学的思考法で把握する経験を基に、人文系理系を問わず自身の「感覚」が赴く分野に量子力学の概念適用を試みることで、新たな領域を生み出すことに挑戦していきたいと考えています。

最後になりますが、記事執筆に伴い学友との交流の機会を頂けありがとうございました。在学生、卒業生、職員の皆様の益々のご健勝を願っております。



高橋 明宏

Akihiro Takahashi

1999年 機能材料工学専攻 修了
小林俊郎 研究室

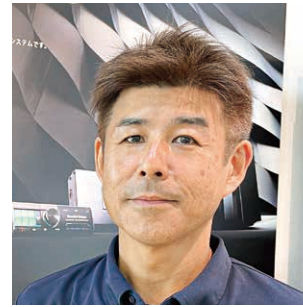
1972年 愛媛県生まれ
新居浜高専 卒業

2000年 日立金属株式会社 入社
2003年 都城工業高等学校 機械工学科 助手
現在 同上 教授

高専専攻科（学位授与機構270号）を修了し、豊橋技術科学大学大学院に入学しました。当時としては珍しいルートでした。博士論文の内容はAl-Li系合金の変形と破壊に関する研究でした。私の経験から、専攻科から大学院に入学する方は博士後期課程修了まで続けることをお勧めします。

大学修了後の三年間、民間企業で鋳物製自動車足回り部品の研究開発に携わりました。研究を思いっきりやってみたいと発起し、運良く都城高専機械工学科（材料力学担当）に赴任できました。現実には甘くないのですが、仕事というのは思いやりをもって遠慮せずに前へ前へ進んでいくことが大切だと思います。全くの素人顧問が男子バレーボール部の監督になり、平成19年度全国高専体育大会で優勝できました。同じ時期に二回目の挑戦で技術士（機械部門）資格にも合格できました。12年間じっくりと進めてきた開発的研究が令和元年度素形材産業技術賞（素形材センター会長賞）につながりました。高専教員初の受賞は素直にうれしく思いました。

現在、年一回、技科大機械工学系の先生方のところへお邪魔しています。そういったOB・OGは多いのではないのでしょうか。さらに各地の高専出身の皆様が母校技科大の教員になってくれております。結局のところ、みんな豊橋技術科学大学が好きなんだと思います。私のその内の一人です。最後に、今、私が過大なく家族と生活できているのは、公私共にご指導いただいた小林俊郎先生（名誉教授、元副学長）、新家光雄先生（東北大学名誉教授、元東北大学金属材料研究所所長）、戸田裕之先生（九州大学教授）との出会いがあったからです。紙面をお借りして、厚く御礼を申し上げます。



小嶋 雅美

Masami Kojima

1998年 機械システム工学専攻 修了
畔上秀幸 研究室

1973年 福島県生まれ
福島高専 卒業

1998年 アルパイン株式会社 入社
2019年 アルプスアルパイン株式会社
2021年 長岡技術科学大学 博士後期課程 修了
現在 同社 機構技術部

約30年前の学生当時は北山交差点の近くに住み、毎日小松原街道をバイクに乗って通った4年間、20歳まで福島で育った自分にとって豊橋での生活は、全てが新鮮でした。学部/修士では形状/位相最適化を専門とする畔上先生の研究室にお世話になり、「形には意味がある」というのを刷り込まれ、その感覚を持ったまま就職し、設計業務に関わりあっという間に25幾年が経ちました。

自動車用CD/DVDプレーヤーのDISC挿入/再生/排出のカラクリ設計、自動車環境を想定した振動/温度/衝撃に耐え得る製品設計、その全てにおいて「形には意味がある」を念頭に部品が最も心地よい形状を意識して設計してきましたが、入社当時の最適化の認知度は低く、ベテラン設計者には理解されない苦勞の毎日だったことを覚えています。

就職して15年が過ぎた頃、様々な巡り合わせから、大学在学中に最も楽しかった「起きている現象の原理/原則の探求」に触れるチャンスを得て、長岡技術科学大学の社会人博士課程で学ぶ機会を得ました。仕事と研究の両立は大変でしたが自分で決めたことでもあり、何とか修了することが出来ました。

現在も就職時と同じ会社で設計業務に従事していますが、開発スピードは入社時とは比較にならない速さになっています。ただどんな時でも「形には意味がある」「原理/原則」を念頭に、「起きている現象」が心地よく感じる形状を創出するように掛けています。在学中の皆さんは様々な恵まれた環境と合わせ若さがあります。これからの数年間で各業界の製品開発スピードは更に増し、激変期を迎えると思いますが、若さを最大の武器に大学で身に付けられる知恵という鎧でその激変期を悠々と渡り歩いて欲しいと節に願っております。



川石 伸太郎

Shintaro Kawaiishi

1989年 エネルギー工学専攻 修了
日比昭 研究室

1964年 山口県生まれ
宇部高専 卒業

1989年 日清紡績(株)入社 ABS事業本部 配属
2001年 コンチネンタルテラス 転籍
(現コンチネンタルオートモーティブ)
2003年 同上 油圧ブレーキ開発部長
2020年 PSS 日本担当事業部長/執行役員
現在 WBS/MTS 日本・韓国担当事業部長/執行役員

高専時代は水力を学び、技科大では油圧を学んだ。機械と車が好きで就職先は、紡績会社が油圧制御ブレーキの世界に挑戦しようという、まるでスタートアップのような会社を選んだ。単なる油圧ブレーキが、車の姿勢制御の要になっている。会社ではタイヤのスリップを検知し、個々に制御して、最後は安全に障害物を回避するか止めるというシステムの全てを経験させてもらった。今、この技術が更に発展し油圧から電動システムに置き変わろうかという時代に差し掛かっている。学生時代から半世紀近く流体に関わってきたわけだが、完全電動化の世界に移行しつつある。社会人の間にはリーマンショックや最近では全世界的な半導体不足、中国のロックダウン、凄まじい電動化への流れ、急速なインフレ等に身を置いた。色々な課題が降り注ぐ中、都度、スピーディに最適な選択をしてきた。時には厳しい判断もせざるを得なかった。精神的、肉体的にも厳しい世の中になってきたが、一方、やりがいや、仲間と共に乗り越えてきた今はかけがえのない財産にもなった。そろそろ潮時である。次の世代に引き継ぐのが今の使命。

この原稿の執筆依頼を受けた週末、豊橋に集まって偶々還暦同窓会なるものに参加した。35年以上振りに会う面々、最初は顔と名前が一致しない者同士。人間の記憶とは凄いものだ！5分もしない内に35年もの時間の流れが吹き飛んだ。皆、良い顔をしていた。豊橋の街並みも当時とは大きく変わってしまったが、皆と一緒に歩けば当時の記憶が鮮明に蘇った。本当に素晴らしい大学に入った。



相良 尚人

Naoto Sagara

2014年 電気・電子情報工学専攻 修了
井上光輝 研究室

1990年 鹿児島県生まれ
熊本高専 卒業

2014年 株式会社IHI
油機システムGr 配属

2019年 株式会社IHI
回転機械エンジニアリング
制御技術部 制御システムGr 配属
現在に至る

私は2010年に熊本高専を卒業し、同年4月に技科大に入学いたしました。大学・大学院では井上光輝先生のご指導のもと、磁気ホログラムの材料や光学シミュレーションの研究に取り組みました。大学院修了後は、生活の基盤となる大きな製品で社会に貢献したいと考え、高専の時から兼ねて希望していた重工会社であるIHIに入社いたしました。

IHIに入社した当初は、船用クレーンの電気設計部署に配属されました。入社1年目の新人にもかかわらず、トラブル対応でたった一人香港のお客様の元へ行き、夜中まで船上で原因究明をしました。暗くなるとそのまま乗船して、船室のベッドを借りて船員と一緒に航海し、外が明るくなるとトラブル究明を再開するような経験もいたしました。頼れる人もいない異国の地でなんとかやってこれたのは、大学の研究で成果を出し、多くの学会や国際学会等で発表する機会をいただいた経験が自信になって、心を支えてくれたのだと思います。

現在は、会社の事業再編の影響もあり、圧縮機や分離機設備の電気設計をしております。船用クレーンとの違いに苦労しましたが、工場インフラを支える立場という責任感をもって、充実した日々を過ごしております。

私が大学生の頃は研究に没頭しておりました。泥臭い作業の中でも成果を得られる喜びが、今の私を形成していると思います。学生の皆さんは学生生活や勉強、研究に追われる日々をお過ごしかと思います。しかしながら、大学生活は自分に時間の投資ができる貴重な機会です。なりたい自分の姿を見据えて、有意義な時間を過ごしてほしいと思います。



江渡 信一

Shinichi Edo

1999年 電気・電子工学専攻 修了
榊原建樹・滝川浩史 研究室

1974年 兵庫県生まれ
神戸市立高専 卒業

1999年 川崎重工株式会社 入社(プラントの電気制御部門に配属)
2005年 カワサキプラントシステムズ株式会社 入社(プラント部門の分社・独立)
2010年 川崎重工株式会社に吸収合併・再統合(プラントの電気制御部門に所属)
2022年 同上 エネルギーソリューション&マリンカンパニー エネルギー事業推進室 異動
現 在 同上 エネルギーソリューション&マリンカンパニー エネルギー事業推進部 事業企画課 課長

学部4年の研究室配属時に「これからはプログラミングを出来た方が良い」と考え、榊原・滝川研にお世話になって、自然エネルギー棟でコンピュータシミュレーション(C言語)の研究に携わりました。当時、Windows95が始まった時期。パソコン関係に疎かった私は、助手の先生と企画して、研究室でマザーボード・CPU・メモリなどのパソコンパーツに関する勉強会を開催し、部品をバラ買いして研究室のみんなでパソコンを組上げました。Windows95が無事動作した時、感動したことを覚えています。

趣味では、M2の時にスノーボードが得意な同級生に初めてゲレンデに連れて行ってもらいました。それ以降、50歳になる今でも家族で北海道二セコにスノー旅行に出掛けるくらい趣味になっています。研究では大変なことも多いでしょうが、皆さんも趣味を大切に学生生活をエンジョイして下さい。

仕事については、入社後、電気制御部門に配属となり、各種プラントの様々なパソコン監視システムの設計業務に携わりました。豊技大にて学んだプログラミング知識が活きて、自分で組んだプログラムを納入したりもしました。

2年前に、「新しいことをやってみたい」と思い、エネルギー事業の事業企画部門に異動しました。これまでと全く異なる職種でしたので、結構大変でしたが(現在進行形で大変ですが)、現在は、顧客納入ガスタービン・ガスエンジンの発電時の余剰電力を活用するサービスの事業提案を担当しています。

当社では、水素を「つくる」「はこぶ」「ためる」「つかう」のサプライチェーン全体で独自技術を開発し、水素社会の実現に向けて取り組んでいます。「つかう」でその一翼を担うべく、これからも事業企画を続けていきます。



弥生 宗男

Kazuo Yayoi

2000年 電気・情報工学専攻 修了
藤井壽崇 研究室

1974年 茨城県生まれ
茨城高専 卒業

2000年 茨城工業高等専門学校 電子情報工学科 助手
2009年 内地研究員(豊橋技術科学大学)
2012年 茨城工業高等専門学校 電子情報工学科 准教授
2023年 同上 国際創造工学科 電気・電子系 教授
現在に至る

修士課程を修了後、縁あって母校である茨城高専に助手として着任しました。その後茨城高専で研究を続けながら、2009年には技科大で内地研究員として井上光輝先生にお世話になり、2011年に博士の学位を得ることができました。現在私は副校長(学生主事)を担当しております。コロナ禍では多くの課外活動が縮小・中止され、部活動等に参加する学生の減少がありました。令和5年度からはコロナ禍前の課外活動体制に戻っておりますが、学生参加数は回復に至っておりません。一方、高専で学生向けの音楽ライブイベントやコンテスト等を開催すると、所属しているクラブに関係なく多くの学生が運営に係わり、盛大なイベントとなりました。クラブに参加はしていなくとも何かをやってみたい学生は多くいて、課外活動の活性化のためにもこれらの学生が活躍できる場を提供することが重要であると考えています。しかしながら自身の学生時代を振り返れば、課外活動には参加せず、所属研究室の電子メール・ネットワークの立ち上げをしていましたので、学生には多様な機会・環境を用意し一歩を踏み出すきっかけを与えることが鍵だと思います。

課外活動だけでなく、勉学、研究、大学外での活動など学生時代の経験は、将来何らかの形で必ず自身の助けになります。技科大には様々なことにチャレンジできる環境があると思いますので、積極的に参加してほしいと思います。今年の大学ロボコンで豊橋技科大チームが3連覇したことは記憶に新しいですが、同窓生としても誇りに思いますし、高専生が技科大を目指すきっかけ、さらには中学生が高専を目指すきっかけにもなると思います。同窓生として高専教員として、豊橋技術科学大学の発展に微力ながら貢献したいと思います。



所 哲郎

Tetsuro Tokoro

1982年 電気・電子工学専攻 修了
小崎正光・長尾雅行 研究室

1957年 岐阜県生まれ
岐阜高専 卒業

1982年 岐阜工業高等専門学校
2021年 同上 教授定年退職

現 在 同校 名誉教授・非常勤講師

2021年からの嘱託教授期間の2年間も過ぎ、今年からは年金生活となりました。豊橋技術科学大学を1期生として卒業後、母校の教員として39年間、再雇用期間と学生期間も含めると、50年間を高専・技科大の関係者として過ごしてきました。平成10年からは恩師の小崎先生が岐阜高専校長に就任され、平成18年からは同じく榊原先生が校長に就任されるなど、現在の第8代伊津野校長まで、岐阜高専の多くの校長は技科大からの就任でした。

所は恩師の支えもあって、平成26年に6年間の文部科学省教育AP事業に採択され、1億数千万円の高専教育改革事業に邁進できました。これは2000年から的小崎校長による全国を先駆けての教育へのICT活用が端緒となっています。本校の教育AP事業は10年後のコロナ禍で真価を發揮しました。全国高専機構による教育クラウド活用量の1/4、12-13高専分は岐阜高専1校による利用となりました。全世界がAI用の情報集約に何十兆円もの資金をつぎ込みつつある中、国立高専機構はクラウド利用料高騰への配慮からか、岐阜高専のクラウド活用はほとんど遮断され、教育資産は凍結されました。

所はこの10年間、上記の教育へのICT活用の一つとして、高専教育への数学CADソフトの活用を推進してきました。全世界の数学ソフト活用教育の現状をSNSでの質問等から確認し、世界最先端・最高レベルの教育資産を構築してきました。最近はYouTubeにて、教育コンテンツの蓄積と発信を進めています。

技科大の1期生は企業等での第一線での活躍を終えつつあります。技科大と高専の連携による、日本では特色の有る教育システムの更なる発展に、今後とも引き続き寄与すべく、残る人生を邁進していきます。Mathcad Prime10 検索



菊田 祥太郎

Shotaro Kikuta

2022年 情報・知能工学専攻 修了
福村直博 研究室

1997年 宮城県生まれ
一関高専 卒業

2022年 川崎重工業株式会社 入社
現在に至る

私は宮城県気仙沼市生まれであり、中学の頃、東日本大震災に見舞われました。大きな被害を目の当たりにし、何か社会の役に立ちたいと決意するのには十分すぎました。教員の道も考えていましたが、この一件があってからエンジニアを志し、高専に進み、豊橋技科大に進学致しました。歳を取るにつれて、目の前の課題も大事だが、長期的な視点に立って課題に取り組みたいと考えるようになり、カーボンニュートラルの実現を謳う川崎重工業に入社致しました。当社は、液化水素サプライチェーンの実現に取り組んでおり、これが実現されれば、CO2を排出しない水素エネルギーの普及を助長し、地球温暖化の問題解決に寄与します。現在、私は、研究開発の部門に配属され、水素に関連する仕事にも携わっています。振り返れば、中学のころの決心のままここまで来たようにも思います。あとは、長い道のりになると思いますが、カーボンニュートラルの実現に向けて尽力していだけですね。

技科大で学んだことは大いに役に立っていると感じる一方で、全く知らない分野の研究開発をすることも多々あり、四苦八苦しながらも学びある毎日を過ごしています。社会人になると、学ぶ意欲があっても勉強の時間を十分に取ることが難しくなります。在学中も学ぶことはたくさんありましたが、社会人になってからもたくさん学ばなくてはなりません。大学では、勉強と研究ができる環境が整っています。その環境をフルに活用して、学びたいことをたくさん学びましょう。それは必ず皆様の力になります。

最後に、学生の時にしかできないことはたくさんあります。この記事を読む学生の皆様も、どうぞお体に気を付けて、より良い大学生活をお送りください。



向井 智彦

Tomohiko Mukai

2006年 電子・情報工学専攻 修了
栗山繁 研究室

1978年 長崎県生まれ
佐世保高専 卒業

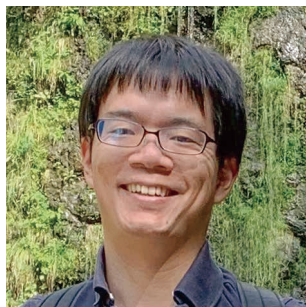
2006年 豊橋技術科学大学 情報工学系 助教
2009年 ㈱スクウェア・エニックス 主席研究員
2014年 東海大学 情報通信学部 講師
2018年 東京都立大学 システムデザイン学部 准教授
現在に至る

私は佐世保工業高専を卒業後、当時の情報工学課程に編入学し、修士課程、博士後期課程を経て、助教として2009年まで10年ほどお世話になりました。学修・研究活動において最も充実していた時間を懐かしき思い出とともに、そうした素晴らしい環境を整えていただいた指導教員や先達の先生方の偉大さを今改めて我が身をもって実感しております。

豊橋技科大を卒業後はゲーム制作企業にご縁があり、いったん大学業界から離れていました。子供の頃に夢見ていたゲーム制作の現場では、「世の中にはこんな凄腕プログラマーがいるのか…！プロのデザイナーはすごい！」と感嘆の毎日でした。民間企業での研究開発活動は大学での研究活動とは違うようにみえて共通点も多く、そこでの経験は現在の私自身の研究の土台になっています。

その後は再び大学業界に勤める機会をいただき、現在はデザインやアートに関する学科に勤めています。理系学部には属していますが芸術系や文系の文化も色濃い組織で、工学・理学系のように科学的真理を追求するというよりも、デザインの幅広い可能性を追求することも重んじられます。そうした組織において、私のような工学系出身者がどのように研究教育に貢献できるのかと未だ四苦八苦しつつ、今も新しい挑戦を楽しんでいます。

こうして多様な現場でお仕事させていただけるのは、豊橋技科大における情報学の学びがあったからこそと思っています。在学生の皆さんも様々なことに興味関心を抱いていると思いますが、まずはぜひ目の前の学びや研究にこそ全力で向き合ってもらいたいです。そうして身につけた経験や知識が、皆さんの未来を思いがけない形で後押ししてくれるかもしれません。



池内 宏樹

Hiroki Ikeuchi

2007年 生産システム工学専攻 修了
章忠 研究室

1982年 京都府生まれ
舞鶴高専 卒業

2007年 松下電器産業株式会社 入社
生産革新本部 配属

2015年 パナソニックセミコンダクターソリューションズ㈱ 転籍

2018年 パナソニック㈱ 生産技術本部 転籍
現在 パナソニックホールディングス㈱
マニュファクチャリングイノベーション本部

大学時代はロボコン同好会と武道部（空手）に打ち込みつつ、当時の生産システム工学系で信号処理アルゴリズムの研究を行っていました。

2007年に当時の松下電器（現パナソニックホールディングス）に入社しました。当時は照明が電球・蛍光灯からLEDへ切り替わる時期で、高輝度LEDに関する技術開発を行っていました。その後、次世代パワーデバイス開発、熱電変換デバイス開発など様々な半導体デバイスの研究開発に携わり、それらを事業化するために、2015年に当時のパナソニックセミコンダクターソリューションズへ転籍しました。転籍先は新規事業立ち上げ部署で少人数しかおらず、生産プロセス開発、生産ラインの立ち上げ、営業活動など幅広い活動を行いました。3年で技術的な目処がたったということで当時のパナソニックに戻ることにし、それ以降はロボット開発を担当しています。何でも掴めるロボットハンド、公道・歩道を走れる宅配ロボットなどを開発しており、ロボットの活躍できる範囲を広げることを目指しています。

卒業後、一貫してモノづくりに関わる仕事をしてきましたが、高専・大学で学んできた体系的な知識と経験が拠り所になってきました。AIなど革新的な技術に目が行く昨今ですが、そういう時代だからこそ基礎が大事だと感じます。在学生、卒業生の皆様のより一層のご活躍を願っております。



木下嘉隆

Yoshitaka Kinoshita

1982年 電気・電子工学専攻 修了
安田幸夫 研究室

1958年 長野県生まれ
鈴鹿高専 卒業

1982年 ㈱日立製作所 武蔵工場 入所
2013年 エルピーダメモリ㈱ 代表取締役社長
(現マイクロンメモリジャパン㈱)

2020年 ㈱日本エナジー エグゼクティブアドバイザー
2020年 ヌヴォンテック/ロジージャパン㈱ 取締役(現任)

この原稿依頼を受けて、1978年に技科大に入学し今日まで40年余りに起きた様々なことが走馬灯のように蘇った。「88番目に設立された国立大学として伝統ある大学と同じことをしては88番目になってしまう」との気概から先生・職員の方々は学生を一生懸命に教育・指導してくださりました。とにかく、何もかも全く無い、ゼロからのスタートで立ち上げなければいけないという開拓者精神や情熱に溢れていたキャンパスだったと思います。当時は、学生一人当たりの教職員数が日本一のレベルであり、とても恵まれていました。若い教職員の方がとても多く、共感をもって学生に接してくれました。一期生の入学当初、大学に併設された学生寮の部屋の電灯が毎晩、深夜の2時、3時までたくさん点いているのを先生方が心配され、全寮生を食堂に集めて指導されたということもありました。今の学生の皆さんには信じられないと思いますが、私の入学当時、本当にあった話です。

私は、半導体が人類にもたらした指数関数的な性能向上に魅了されました。どうしても半導体を勉強したいという強い思いを貫き、高専から技科大に進学し、日立でもその後の会社でも、およそ40年間、一貫して半導体の仕事をすることができました。現役として残された時間は少なくなってきましたが、これからは日本の半導体産業、技科大のために何か少しでも恩返しができるように過ごしていきたいと思います。

※私の個人的なことは、技科大広報誌「天白」No.150「輝くギカダイ卒業生」および村田機械(株)広報誌「TE TO TE(てとて)」No.8「半導体対談」に掲載されていますので、よろしければご覧ください。



伊達 勇介

Yusuke Date

2005年 物質工学専攻 修了
西宮伸幸 研究室

1981年 鳥取県生まれ
米子高専 卒業

2005年 鳥取県商工労働部 鳥取県産業技術センター無機材料科 入庁
2007年 地方独立行政法人 鳥取県産業技術センター 無機材料科
2011年 米子工業高等専門学校 物質工学科 助教
2017年 同校 物質工学科 准教授
2021年 同校 総合工学科(化学・バイオ部門) 准教授
現在に至る

私は、米子高専から編入し、修士まで進学しました。技科大を修了後は、地元の鳥取県庁に勤めました。私のいた部署は商工労働部の鳥取県産業技術センターで、行政職ではありません。地元の中小企業を技術面から支援する部署で、研究員として日々、材料分析や評価、不良品の解析や自身の研究テーマを行っていました。当時、私はリサイクル分野を担当しており、持ち込まれるのは食品、鉄鋼材料、燃焼灰など、多岐にわたる材料でした。毎度異なる材料の評価をせざるを得ず、大変な状況でしたが、今ではそのおかげで幅広い知識が身についたと思っています。

その後、縁あって現在は母校の米子高専に勤めています。高専に勤めた当初は博士号がなく任期付きの採用でした。採用後、数年かけて博士号を取得し今に至ります。実は、私はかなりの飽き性で、趣味や研究も昔から長く続くものがほとんどありません。現在の研究も、双翅目の昆虫であるヌカカの発生状況の調査、低温処理を利用した食品の高品質化（食品）、高分子ナノ繊維を利用した機械加工用の固体潤滑剤の開発、センシング材料の開発など、自分で言うのもなんですがジャンルが無茶苦茶です。ただ、それらの知識が融合し新たな発見に結びつくこともあり、そこが面白いところでもあります。

後輩の皆さんへのメッセージですが、とにかく色々なことに挑戦してください。失敗するかもしれませんが、本当にそれが失敗かどうかは実は分かりません。私は米子高専の受験時、機械工学科が第一志望でした。しかし、第一志望には受からず、第二志望の化学に合格しました。そして、今では母校の教員です。人生はなにが成功で失敗かは最後まで分かりません。



高山 勝己

Katsumi Takayama

1990年 物質工学専攻 修了
神野清勝 研究室

福井高専 卒業

1990年 福井工業高等専門学校
物質工学科 助手

1997年 博士(農学)(京都大学) 取得
2012年 同上 物質工学科 教授
現在に至る

1990年3月に物質工学専攻修士課程を修了いたしました。在学中は、3回生で伊藤浩一先生、4回生からの3年間を神野清勝先生にご指導頂きました。当時の神野研究室はキャピラリーカラムを用いた分離分析をベースとし、私はセルロースファイバーやキトサンビーズを充填剤に用いた糖分析に取り組ませて頂きました。キャピラリーカラムや検出器セルは全て手作りで、手先が不器用だった私は随分苦労させられた事を記憶しています。「必要な器具や簡単な機器はまずは自分で製作するもの」という基本精神をここで学ぶ事ができました。神野研究室には、度々留学生や海外研究者の訪問がありました。その度に英語でのコミュニケーションを余儀なくされ、おかげを持ちまして私の外国語（英語）アレルギーは神野研時代に払拭することができました。

マスターを修了後、福井高専に教員として着任し、酵素や微生物を用いたバイオセンサーの研究に取り組むことになりました。以来、微生物を用いたバイオレメディエーションやバイオリファイナリーの研究にずっと取り組んできました。光陰矢の如しで、30年以上の年月があっという間に過ぎてしまいました。この間に4回の担任を担い、福井高専から多くの学生を技術科学大学に送り出す事ができました。神野研究室を引き継がれた齊戸美弘先生にも何名かの福井高専生をお世話頂きました。

私は定年まで残すところ5年となりましたが、これからも技術科学大学の卒業生として母校に誇りを持ち、福井高専から技術科学大学への編入希望生が絶えることのないよう微力ながら努めて参りたいと思っています。



市成 剛

Tsuyoshi Ichinari

1999年 エコロジー工学専攻 修了
木曾祥秋 研究室

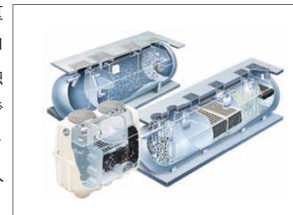
1974年 鹿児島県生まれ
鹿児島県立鶴丸高等学校 卒業

1999年 フジクリーン工業株式会社 入社
2008年 豊橋技術科学大学大学院
工学研究科博士後期課程 修了
現在 同社 執行役員 水環境研究所 所長

1993年4月にエコロジー工学系の一期生として普通高校から入学しました。当時は新設されたばかりで、研究棟は建設途中でした。学部4年次は建設工学系の実験設備や研究室を一時的に借りて、膜分離を用いた排水処理に関する研究を行いました。

修士課程修了後、フジクリーン工業株式会社に入社し、約25年間浄化槽(イラスト)の研究開発に携わってきました。大学卒業後も木曾祥秋先生や研究室の学生さんには、共同研究や開発を通じて大変お世話になり、社会人として博士号を取得させていただく機会にも恵まれました。最近では、技科大のOBとの協業も増え、その優秀な先輩方や後輩達との交流を通じて、自分の未熟さを痛感することがあります。

現在は、研究開発部門のマネジメントを中心に、SDGsや脱炭素、資源循環といった技術課題にも積極的に取り組んでいます。また、日本の浄化槽システムを海外に展開する経験と知識を活かし、世界各地の地域特性に合わせた浄化槽システムの開発に取り組み、世界の水環境の改善に貢献したいと考えています。そのためには、グローバルな人材育成が重要だと感じています。国際協力や海外プロジェクトに取り組む上で、多様な文化に触れ、異なる価値観を尊重することが大切です。在学生の皆様には、国際交流の機会を積極的に活用し、国境を越えた友人や知人をたくさん作っていただきたいと思います。



高崎 誠司

Seiji Takasaki

1983年 物質工学専攻 修了
小寺喜秀・上野晃史 研究室

1958年 茨城県生まれ
小山高専 卒業

1983年 川研ファンケミカル(株) 入社
2009年 同上 福井工場長
2017年 取締役ファイン事業部長
2021年 四ツ葉油化株式会社 代表取締役社長
現在に至る

現在、朝夕にウグイス等の野鳥の美しい音色が聞こえる千葉県旭市に単身赴任しており、ここでの生活も終わりを告げようとしています。会社人生40年を振り返ってみると、様々な経験をさせていただきました。そして、思うところは無駄な経験とは無いもので、その経験が次の、又はその次の仕事に生かすことができるものであった事に不思議さを感じております。逆に言えば、その過去の経験の延長でしか仕事をしなかったとも言えるので、誇れる事ではないかもしれません。

学生時代は触媒の研究をしており、入社後、研究所に配属されて不均一系の触媒開発に携わりました。半年経過後に全く関係のない会社に出向を命じられ、そこでポリマーの重合反応やスケールアップの研究等担当しました。この経験は川研に戻ってからの触媒研究や有機合成の仕事に応用することができました。研究職から転じて営業を担当した後に工場運営、事業部運営、現在の会社経営を担当しました。研究経験が営業活動のツールとして役立ちました。研究・営業経験が工場運営に生かすことができました。工場運営の経験が事業部運営や会社経営の判断に参考となりました。

また、ある時期には組合活動に関与しましたが、その組合経験は会社経営に大いに役立つ事がありました。更に触媒の研究・営業活動を通じた業界関係者との繋がりが今も続いており、様々な経験をさせていただく機会を作っていました。一つの経験がその場かぎりで終わるのではなく、次に繋がり、広がっていった40数年でありました。リタイア後の人生も広がり求めた生活をしたいと考えております。



ヒン ラッチャナー

Hin Rachana

2009年 建設工学専攻 修了
加藤史郎 研究室

1980年 カンボジア生まれ
大分高専 卒業

2009年 日本建設コンサルタント株式会社 入社
現 在 同社 カンボジア事務所長

2001年に生まれ育ったカンボジアから日本に留学して、東京日本語学校、大分高等専門学校を終えて、本学建設工学課程に編入し、加藤指導教員の元で大学院を修了して、中日本建設コンサルタント株式会社に就職しました。大学時代は多くの同期に囲まれ、研究室の同期、先輩方、特に中澤先生、加藤先生に多く指導していただき、感謝申し上げたいと思います。

大学時代はRCシェルを研究テーマとし、毎日RC冷却塔の動的分析を含む性状分析を行っていましたが、会社に入ってから上下水道施設の耐震診断を主として日本国内業務に従事、2013年ごろから上水道施設の計画・設計に部署変更し、多くの方々、特に名古屋市副市長を経験され、現在、NGO代表として開発途上国を中心に活動されている山田雅雄氏との出会いから海外案件(スリランカ国、カンボジア国)にチャレンジし始めました。

2017年より活動拠点を日本から母国カンボジア国に変わり、地方水道運営支援(JICA草の根事業)、ヒ素除去技術開発支援(T大学の事業)、カンボジア国下水道計画・設計指針の作成、上下水道人材育成など学生時代に比べて幅広く多岐に渡る分野の業務に触れ、特にJICA事業では中学生、高校生、大学生、住民に触れ合う機会が多く、自分の学生時代を思い出しながら、業務を遂行しています。

最後に、このような執筆の機会を頂きありがとうございます。豊橋技術科学大学で学んだことを活かして、中日本建設コンサルタント株式会社を通して社会貢献している部分はあると思いますが、すべては人との繋がりから成り立っていますので、後輩の皆様方も人とのご縁を大事になさってください。



東 武志

Takeshi Higashi

1993年 建設工学課程 卒業
松本博 研究室

1971年 石川県生まれ
石川高専 卒業

1993年 東急建設株式会社 入社
1997年 株式会社相互建設 入社
2005年 同社 代表取締役就任
現在に至る

91年に石川高専から技科大に編入し、全国の高専から集まったたくさんの仲間たちと交流できました。週末の夜になると友人たちと明け方まで語り合ったことを思い出します。また、本間・松本研究室では建築環境学を学び、現在でも住宅の温熱環境の施工に生かされています。私は学部を93年に卒業し東急建設株式会社に入社。大阪で生涯学習施設、高松で私鉄駅周辺の再開発ビルの建設に携わり4年ほど勤務していましたが、父が経営している小さな工務店に97年に入り、父の逝去後に代表取締役就任に就き現在に至ります。今年元日に発生した能登半島地震では、金沢市内でも震度5の揺れを受けましたが、過去に経験したことのない揺れに恐怖を感じました。翌2日以降私の会社のお客さんから、棟瓦がずれたのでシートをかけてほしいという依頼が数件ありました。現在は能登方面での住宅の修理にかかっている最中で、工事をしている住宅までの道中では、震災以降ずっと屋根にブルーシートがかかっている状態の家や、全壊でガレキになったままの建物の横を通っています。全国の方々からの支援に感謝しながら、私自身も能登の復興に微力ながら手伝っております。この号を読んでいただいている皆様にも心より感謝いたします。この震災後、今まで耐震改修に意識が向かなかった人たちが地震に安心できる家を求めるようになって来ていると肌で感じています。学校のある豊橋は、南海トラフ地震がいつ発生するかという状況です。日本全国どこにいても災害は起こるもので、在学生並びに各地に住んでいる同窓生の皆さんもその地域に貢献できるよう準備・研究をお願いしたいと思います。



馬淵 紀充

Norimitsu Mabuchi

1999年 エコロジー工学課程 卒業
木曾祥秋 研究室

1976年 愛知県生まれ
豊田高専 卒業

2002年 丸み興商株式会社 入社
2012年 同上 代表取締役就任
現在に至る

豊田高専土木工学科から本学エコロジー工学課程に編入学した私ですが、化学の基礎力不足で苦勞し、先生や先輩方に多分にご助力を頂きながら落第すれすれで卒業させて頂いたことを思い返しております。

現在私は、鉄鋼材料の商社・販売会社を経営しております。技術力ではなく、販売力をベースに企業活動をしていますので、学生時に学んだ工学分野とは違った生業です。当社の業務は平たく言うと、メーカーが生産した鉄鋼材料を流通させ、建築物や自動車など工業製品への橋渡しをすることです。

技術者の努力によって何らかの課題を解決する技術が開発された後、世間に浸透していく段階では、殆どの場合経済活動を通じて行われます。そういう意味では、販売という活動でもっとも世の中に貢献できるのです。

仕事に臨む上で、自分の事だけでなく、「世の中に貢献している」「誰かの役に立っている」と考えることは、シンプルで根源的な動機であると私は考えています。

ところで、私は仕事の傍ら、世界的な奉仕団体であるロータリークラブに所属しています。奉仕活動の一環で、留学生向けの返済不要の奨学金プログラムがあり、技科大在学の留学生とのご縁も頂きました。本学の留学生は優秀な方が多く、希望を持って異国で努力される姿勢にこちらが刺激を受けております。

在学生皆さまの多くは技術職や教職の道に進まれるかと思います。私の体験はお役に立つことは少ないかもしれませんが、一つの参考事例として捉えて頂ければ幸いです。



近藤 恵美

Emi Kondo

1987年 建設工学専攻 修了
小林陽太郎 研究室

1960年 愛知県生まれ
岐阜大学工業短期大学部 卒業

2013年 豊橋技術科学大学 助教
2015年 有明工業高等専門学校 助教
2020年 近畿大学工業高等専門学校 教授
2024年 大同大学 教授
現在に至る

今年3月高専の教員を定年退職し、一旦「定年」という区切りを迎えました。現在は縁あって専任教員として引き続き学生指導にあたる機会を貰っています。区切りの年に依頼をいただきましたので、今思うところを残します。

高校は普通科で、特に何も考えていない流されるだけの学生でした。流れ着いた短大は土木工学科、当時は「ドボ女」と呼ばれることもなく女子学生は全く企業から相手にされません。流されるように教員に勧められた技科大へ編入することになりました。「土木の道は厳しい、私は建築でやっていけるのか？」研究室選びで路頭に迷うこととなった時「建物の中には人がいる、その環境調整が何よりの設計なんだよ」と小林先生に掛けていただいた一言が細くつながり、今の道が開けています。大学院修了後は企業に就職しましたが、結婚を機に退社し、またまた流されて時間を過ごしていました。夢から覚めるようにハタと気づいた46歳。修論に明け暮れていた時間がとても恋しくもう一度大学に戻ることを決意しました。そして学位記を手に、32枚の履歴書を送り、教育に携わる人生がスタートしました。

今になれば、研究者としては流されていた時間がとても勿体なかったと思いますが、教育では役立ってくれていると信じています。

流されるように生きてきた60数年ですが、節目節目で技科大の先生方や先輩諸氏、同級生の手がそこにありました。大きく導いてもらった技科大の力です。

在校生の皆さん、大学生活は人間力の育みの時期です。周りの力を自分の推進力にできるようなネットワークを大切に育んでください。どうぞ自分の人生を大切に邁進してください。